個性豊かなメンバー

慣れるに従い違う風景が見えてきた。徐々にスポーツやパーティなどを通じ、仲間と一緒に生活を楽しむようになった。良くも悪くも個性が強い学生が多かった。素晴らしい友人が多くできたが、正直最後まで好きになれない人もいた。ACでは日常の生活を通じての個人対個人の理解と信頼が一番重要だった。個性を理解する上での一要素である出身の国や文化的背景などは、その後からついてくるような感覚であった。出身国などではなく、個人の集積がACコミュニティを形成していた。二年目が近づくにつれ、さまざまな活動分野で活躍目覚ましいリーダー格が生まれた。そうでなくとも、自分の持ち味や進むべき道をよく理解した上で迷いなく毎日過ごし、存在感ある光を放つ者も少なくなかった。なぜか全ての活動が可もなく不可もない状態となり、また、自分が将来に向かってどうするのか迷いもあった私は、周りをうらやましく思うこともあった。

ジェンキンズ寮の１年生の仲間（前列右が筆者）

ビジネスの世界へ

理系であった私だが、ACでの経験を契機に、社会や世界と直接関われるような道を探ることにした。経済学を学び、国際展開を進めつつあった日本生命に入社した。幸い、これまで何回か海外での生保事業や資産運用の仕事に関わることができた。予断なく人に会い相手を理解していくこと、個人対個人の関係を軸に信頼関係を築いていくこと、現実・現物を確認しながら、自分で考え、意思決定・行動することなどは、ビジネスでは基本行動だと思うが、特に海外業務においては特に重要なスタンスだ。自分の場合は、少なからずACでの経験で育まれたと思う。UWC卒業生との関係も広がった。海外政府向け円シンジケートローン業務では、同じ業務を担当していたAC同期の中田一志（当時興銀）とよく顔を合わせた。ニューヨーク赴任中は米国人を中心とする現地UWC卒業生会に参加、公私両面でアドバイスをもらったりした。

まだ気付かぬ財産

鮮烈だった記憶も徐々に薄らぎつつある。ただ、何かわからないが、素晴らしいものを得たという卒業した時の実感は健在だ。まだまだ自分では認識していない財産があるからだろう。二年後にやってくる卒業三〇周年記念の同窓会で中年となった誰かが、または、ときどき頭を過る当時の若い姿のままで誰かが、それを気づかせてくれるのだろうか。将来に向かっての楽しみは尽きない。このような貴重な経験を与えて頂いたUWC日本協会やスポンサー企業他の方々に改めて感謝するとともに、いまだ世界に類を見ないUWCの発展を微力ながら支えていければと思っている。

将来に向かっての楽しみは尽きない

日本生命保険財務企画部長
赤林富二（あかばやし　とみじ）

一九七九年ＵＷＣ英国アトランティックカレッジ（ＡＣ）卒。八四年東大経済学部卒、日本生命保険入社。八九年ハーバード・ビジネススクール卒。秘書部、国際業務部などを経て現職。

反対する親を説得

海外に漠然とした関心はあるものの、今の自分とは全く関係がないと思っていた高校二年春、校内で紹介されている留学制度に一緒にチャレンジしないかと親友に誘われた。高い倍率に合格する訳がないが、英語の勉強と思い、保護者承諾印は勝手に押して出願。合格通知を受けて自分に降って来たチャンスに驚いた。父親は激怒した。「友達は必死に勉強しても一浪するかも知れないのにお前は二年間ＡＣに行って、一浪から受験勉強をスタートするつもりか」。こちらも宝くじを守るのに必死だったので、親子で卒業生の話を聞き、渋々了解してもらった。

鍛えられた一年目

渡航前に描いていた留学生活がバラ色すぎたことは現地に到着して間もなくわかった。ＡＣは世界七〇カ国から選抜されてやってくるチャレンジ精神旺盛な男女約三五〇名（二学年）で構成されている。基礎学力はもちろん目的意識が高い学生が、全寮制のキャンパス内で国際バカロレア試験に向けての勉強や社会奉仕活動等を行う。教育方針は日本とかなり異なっていた。授業では、教師の講義・指導を受けつつも、自ら調べ、考えをまとめ、伝えるということが重視された。たとえば、生物では、早々に、動物分類の授業で各人が口頭発表を課せられたし、キャンパス内の農場からの子羊を皆で解剖、レポートを作成したりした（私は、前者でクモ類、後者で後ろ足の筋肉と骨格の構造を担当した）。日本人の数学レベルは高く大丈夫と言われていたが、宿題は多いし、母国で飛び級をし、ＡＣでは大学レベルの数学に挑戦している者もおり、余裕がある訳ではない。日本人の英語力の弱さは有名であったが、非英語圏からの学生が三分の一くらいなので、お客様扱いは基本的にされない。また、必修の社会奉仕活動では、主体性や責任感が重視されていた。海岸救助隊では、救助・救命のトレーニングを積みライセンスも取得したが、海水浴場での監視員としての初日、「トミジ、周囲に仲間もいるが、溺れている人を見つけたら、おまえが全速力で海に走り助けるんだぞ！」と担当教師に意識を徹底させられた。朝七時の水泳練習から夜、宿題を終えての一〇時半の消灯まで、コミュニケーションに苦労をしながら、新しい生活に適応するよう頑張り、精神的にも鍛えられた。

●㈳ユナイテッド・ワールド・カレッジ（ＵＷＣ）日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるＵＷＣの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるＵＷＣ傘下の高校に派遣し、すでに四〇七名の卒業生を輩出している。